

CAR BUTTON CLOTH THE LEMONHEADS カー・ボタン・クロス レモンヘッズ

- 1 イッツ・オール・トゥルー
IT'S ALL TRUE
- 2 イフ・アイ・クド・トーク
IF I COULD TALK I'D TELL YOU
- 3 ブレイク・ミー
BREAK ME
- 4 ホスピタル
HOSPITAL
- 5 ザ・アウトドア・タイプ
THE OUTDOOR TYPE
- 6 ルーズィング・ユア・マインド
LOSING YOUR MIND
- 7 サムシングズ・ミッシング
SOMETHING'S MISSING
- 8 ノックスヴィル・ガール
KNOXVILLE GIRL
- 9 シックス
SIX
- 10 カモン・ダディー
C'MON DADDY
- 11 ワン・モア・タイム
ONE MORE TIME
- 12 テンダーフット
TENDERFOOT
- 13 セキュラー・ロッキュリッジ
SECULAR ROCKLIDGGE
- 14 シーガールズ・アート・フリー*
SEAGULLS AREN'T FREE
Written by Evan Dando/EMI/Virgin Music
Inc./Jon Bing Music Inc./ASCAP

* BONUS TRACK



「あいつから手紙が来たぞ！」と色んな人に電話をかけたみたい、そんな気分だ。取材で2回会っただけで友達でも何でもないが、イヴァン・グッドゥという男はそんな親近感を感じさせるロック・スターはいないんじゃないだろうか。その人懐っこい整った顔立ちや、隠し事のできない正直さ、飄々とした味を持った増えないキャラクターはもちろん、彼が生み出す馴染みやすく飽きのこないメロディやちょっと鼻歌のような調子で歌う声など、音楽的にもそれは溢み出ているのだ。ふと高校の卒業アルバムを開いた時に同じクラスの集合写真に叔が写ってたとしても(ないない:笑)、全然違和感を感じないと思う。

しかしその一方で、爽やかな好青年イヴァンとは反対の方向に傾いてしまうこともしばしばあって、バンドのブレイク前に一度、そして前作「カモン・フィール」リリース後に二度目の大きな落ち込みを見せている。インタビュなども、自分の状態をコントロールできずにあちこち揺れてしまうことを告白しているし、悪夢や夢遊病に悩まされたりもしていたらしい。ツアーをすらすらと消化してしまう部分では、ルックスとは裏腹にタフさに欠けてもいるようだ。そういう不安定さはこの現代において誰しもが抱えているものではあるが、それが少し顕著なこの男の繊細さ、微妙な危うさがまた、どうにも彼が、そしてそういったものを内包しつつも表面的には軽やかに響くこの男の作る音楽が、気になる要因のひとつである。

さあ、最大のピンチを乗り越切ったの久々の新作がもうここに届いている。とにかく聴きかてしょうがない、もう何十回も聴いた。でもこれに関しては、後でゆっくり触れたいと、とりあえずイヴァン・グッドゥがこの作品にたどり着くまでの道程、3年間の紆余曲折をざっと振り返っておくことにしよう。

94年1月の2度目の来日時、イヴァンは疲れ切っていた。初来日で会った時少し疲れていて取材中に「ちょっと横になっていいかな」と寝ながら話していたが、そんなの比較にならないくらい疲弊度で、まるで病人にインタビューされているような痛々しさを感じたのである。東京でやったライブも最終日以外は決まっていた出来ではなかったし、様々な形で「イヴァン・グッドゥ=レモンヘッズの危機」を露呈してしまっていた。イヴァンもさすがに自分がギリギリの所まで来ているとわかっていて、「とにかく休みを取りたい」と何度も漏らしていたのだ。

そんな状態で日本を離れたレモンヘッズだったが、それだけでなく目を離せないくらいニュースが相次いだ。まずは春にレズ・マークの長い髪をバサリ切ってしまい、それに反対するファンが「Die Evan Dando, Die」というファンジンを発行したり、同時期に日本に来ていた仲良くなったらしいイギー・ポップのバックステージを訪れた際に髪形をからかわれたりしたという、まあ他愛のないもの。そして7月。ニューヨークで行なわれたレモンヘッズのギグにホールのコートニー・ラウがゲスト参加するが、カート・コバーンとホールのベストニクリステン・ファーフの急逝直後という悪いタイミングで(というより、むしろそのことで落ち込んでいてお互い慰めが必要だったからこそだと思おう)、イヴァンとカートの本心コートニーの仲睦まじい写真(二人のキス・シーンなど)が宿泊したホテルのゴミ箱から流出して非難を浴びる。8月にはレディング・フェスティバルに参加、ここでのステージは好評。レディングの直後には、今とときめくオアシスが行なったヴァージン・メガストアのマーブル・アーチ店間イベントに飛び入り参加して話題になった。

そして、そうこうするうちに決定的な情報が入っ

てきた。90年の初メジャー作「Lovey」の後に、落ち込んだイヴァンが訪れたオーストラリアでまたまた大出合い、その後のバンド大躍進を力強く支えたベジシストのニック・ダルトンが脱退を表明したのだ。彼は自分がオーストラリアでやっているレーベル、ハーフ・ア・カウに専念したいということだったが、やはり長いツアーで疲れていて、レディングのステージが良かったのは当時のメンバーでの最後の演奏だと思っていたからだと話している。そしてドラマーのデヴィッド・ライアンも脱退。二人とも人間関係の悪化が原因ではないようだが、これから更なる前進を、という所でこのラインナップは崩壊してしまっていたのだ。元々このバンドはメンバー・チェンジが激しく既に最初からのメンバーはイヴァンだけになっていったとはいえ、彼自身も「バンドとしてまとまってきた」と話していただけにこれはかなりの痛手だったと思う。しかしレモンヘッズの浮上と共に、イヴァンがダイナソー・JRにおけるJ・マキシスのようなバンドの代名詞となるほどの存在に成長していたため、彼が限られたレモンヘッズは終わらないと誰もが信じていたことだろう。それを証明するかのよう、年末にイヴァンはアメリカでソロ・アコースティック・ツアーを敢行。この頃イヴァンがオアシスの「リヴ・フォーエヴァー」をレコーディングしたことが明らかになったが、発表はされていない。

95年が明けてしばらくすると「レモンヘッズ、レコーディング開始。後任ドラマーは元ダイナソー・JRのマーフ」が報じられ、やっとな新生レモンヘッズの始動が伝えられる。この後、グラストンベリ・フェスティバルに登場したイヴァンが観客からブーイングを浴びて、たった5曲でステージを降りてしまったという一件もあって少し心配したが、前作「カモン・フィール」から丁度3年、こうしてまたレモンヘッズの新作が完成したわけだ。

さっきも書いたが、ずっと気になっていた奴から届いたこの手紙を、もう何回も読み返した。これは彼の新しい出発の声明であるわけだが、端的に言ってしまうとここには大きな変化や衝撃はない。気負いも意気込みもない。ごく自然にここにある、そんな感じがした。だから初めて聴いた時はちょっと肩透かしを食ったような気もしたが、何度も聴くうちにふと思いついた。そう、随分前にあいつはもう、マイペースでやることを学んでいたんだ。どうやって自分自身を自分自身らしく表現するのか。そしてそれは、ちょっと落ち込んだバンドのメンバーが変わったくらいで揺らいでしまうようなやわなものじゃなかったということなのだ。うーん、奴、思ったよりも全然強くなっている。

ツアーの合間にレコーディングしてしまったという勢いが充滿して、ふっくらたようにハジけた「カモン・フィール」と比べると、全体的に落ち着いた雰囲気。「俺は結局、最後には君の所に帰って来るんだ」とイヴァンは言ったか知らないが、「彼女の歌なしではやりたくない」とまで言って何だかんだずっと参加してもらっていたジュリアナ・ハットフィールドが、ここにはいない。そのために華やかさという要素はなくなった。こっちは心の中で、うっかりジュリアナの分を口ずさんでしまったりもするんだけど(「ワン・モア・タイム」は誰に向けて歌ってるんだろ?)。ただジュリアナとは決別してしまっただけではなく、ホストン沖の島に住んでいるイヴァンの所にちよく遊びに来ていたとか、このアルバムは初めから、彼女の声を必要としなかったのだから。でも、直の最後にあの囁き声(最近では女優として脚光を浴びている女の子の?)をしっかりとフィーチャーしてるのはさすがといたところか。

そういうわけでやや地味な印象もあるこのアルバ

ムではあるが、その分音楽的には深みを増している。曲調やテンポも含めて、以前よりヴァアランティに富んでいるのだ。これに貢献したのは、豪華な共作陣。まず一番の話題は、今や世界的なロックロール・スターになってしまったオアシスのノエル・ギャラガー……のはずだったのだが、彼の共作曲「Purple Parallelogram」はまだ完成に至っていないという2人の声明とともに、ギリギリの所でアルバムからは外されてしまった。その曲はノエルらしい味がよく染みた、オーストリア系ポップ・ソングに仕上がっている。近い将来に「完成」して、日の目を見て欲しい佳曲だ。で、スコットランドのギター・バンド=ユージニアスを率いるユージン・ケリー。こっちは囃も、ユージンお得意の親しみやすいジャンプ・ポップだ。アコースティック・ツアーと一緒に回ったエピック・サウンドトラックスの囃は、ラウドな曲が多い後半で優しくワン・クッション入れてメリハリをつけている。他にも長い付き合いになってきたオーストラリア人のトム・モーガン、そしてアダム・ヤング(すみません、よく知りませんが)。囃は今にもバク・パイプが流れてきそうなトラッド、前作に続いて最後にくっついてくるインストはイヴァンの大好きなブラック・サバスを思わせるようなヘヴィ・メタリックなナンバーで、今までにない多彩さが楽しい。あちこちでアクセントとなる各種SEも効いている。

何よりも、レコーディングして楽しんで作ったのが伝わってくるのがいい。ヴォーカルも肩の力を抜いて、これまでで一番気楽に歌っている感じがする。何でもミキサーの下に寝転がったまま歌った曲さえあるそうだ。とはいえ囃や囃は曲調と歌詞のギャップがちょっと不気味だったりもして、イヴァン・グッドゥらしいアンビヴァレントな部分もしっかりあるのであった。結局、一度は追い詰められてやる寸前まで行ったものの「やっぱり自分には音楽しかないんだ」と実感し、改めて音楽をやる楽しさに没入一方で、色んな経緯によって「世の中つらいことだ」ともしみじみ感じた、その両方がまぜこぜになったアルバムなのだ。

あー、メンバーにも聴きなきゃなあ。ただドラマーは前出のマーフとしても、イヴァンは主要楽器を全部手掛けているし、ちょっと前にリリースされていったアメリカの昔のテレビ番組挿入歌のカヴァー集「School House Rock!」ボックスに入ってた曲(パット・ホル・サーファーズのギギーがゲスト参加!)ではベースをこのアルバムとは違う人が弾いてた(しかもブックレットにあるバンドのイラストは、イヴァンと女性二人——クレジットはホルのメリッサとパティ——というもの。よくわからん)、今の所属している写真はイヴァン一人のものだけだし、イヴァン(と、もしかしたらマーフ)以外は流動的だと考えていいのかもしれない。まあ2年前は決まった住所もなかったくらいで、そもそも彼は放浪者なのだ。色んな場所に行っても色んな人に会い、それによって自分を高めたいみたいな人間なのだ。行きたい所に好きな時に行ける身軽さも、必要なんだろう。何をやりたかいはわかっていて、後はそれを一緒にやるか/やりたくない仲間をその時々で見つけなければいい。

実はこのアルバム、初めて聴いた時に一発で気に入ったわけではない。聴く度にどんどん好きになった。音楽的には懐が深くなり、少し大人になったからだろうか。それは、イヴァンが大人になったから出てきたものなのだろうか。いや、そんなことはどうでもいい。こうやって手紙は届いたのだ。後は元気な顔を見せてもらいたかった。相変わらずの、あの人懐っこい笑顔を。

1. イッツ・オール・トゥルー

話せるようになってこのかた
オレは泣いたことなんかないんだぜ、ベイビー
歩けるようになってこのかた
オレは転んだことなんかないんだぜ、ベイビー
オレはテレビばかり見てても飽きないし
靴の中に石ころが入ったことでもない
もしもオレがトライしたら、ベイビー
きみはオレを信じるかい？
ありきたりの響きにオレもきみももうんざりするかな？
あのドラッグをとってコメンよ
それよりいいかと思いつかなかったんだ
全部ホントのことだよ
オレにはオレがいて、彼女にはきみがいて
何杯か一緒に飲む時間がある
オレが豊饗な時にはきみは突き放したりしない
オレが嘘をついたらきみはうのみにしたりしない
本当はもう行けなさいやばいんだけど
一日中ここに居ることになりそうだ
全部ホントのことだよ
オレにはオレがいて、彼女にはきみがいて
でも一緒にバラケート降下する時間がある

目が覚めたらいきなり廊の中には誰もなくて心は傷だらけ
なってるけど、オレにはありえない
オレはテレビばかり見ても飽きたりしないんだ

2. イフ・アイ・クウド・トーク

9時半、9時45分、10時15分
そしてまたオレたちの出番だ
ちよっと待てよ
オレたちヤバいになったんじゃねーか？
オレのソロフトを便所に流して
さあ、またオレたちの出番だ
気がついてオレはもう少しで濡れそうになっただ
歩いて戻って
さあ、またオレたちの出番だ

口ささえければ教えるよ
微笑むことができたお知らせよ
君はほのか遠くにいる
僕の一番の空想上の友だち

クメールルージュの大量虐殺が何だって？
君の所かヒトラーの「我が闘争」か
オレは今あの大に首をやるてる
漠然とした手がかりさえなく、ちよっとせむし気味
血液のバランスを合わせるために
さあ、またオレたちの出番だ
9時半、9時45分、10時15分
そしてまたオレたちの出番だ

口ささえければ教えるよ
微笑むことができたお知らせよ
君はほのか遠くにいる
僕の一番の空想上の友だち

3. ブレイク・ミー

しつとりと低い声で話して
僕に聞いて欲しいと思ってるみたい
にであらめにしてやべたって通じるものさ
君は映画に出て、ここにはいない
僕が君に望む通りに
その通りに、その通りに、その通りに…
君は映画に出て、ここにはいない
僕が君に望む通りに
見たくもないものを持つ価値なんてない
君は映画に出て、ここにはいない
そんなことまるで構やしないよ
僕には、僕には、僕には…

ここに来て、ベイビー、僕を嫌ってはいないと誓って
雨傘の葉っぱ、フェアなままでいて、僕を救って
最初っからやり直し、ヘザー、クローバー、おいでいて、

ローバー
僕を打ち砕いて、僕を打ち砕いて
しつとりと低い声で話して
僕に聞いて欲しいと思ってるみたい

4. ホスピタル

あるビョーキが病院の中を巡回してる
青々とした葉っぱが枝から落ちてく
あるビョーキが病院の中を巡回してる
青々とした葉っぱが枝から落ちてく
逃げなさいやばいよ
錠剤の果をかけたなさいやばいよ
夜遊びしなさいやばいよ
ベッドに寝てなさいやばいよ

5. ザ・アウトドア・タイプ

常に屋根の下にいた
ずつと家賃を払ってた
テントに足を踏み入れたことなんか一度もない
サバイバルのために火を起こすなんてはくはは無理
アウトドア・タイプだなんて噂だったんだ
星空の下で眠ったことなんかありやしない
それに一番近い経験といえ
車がエコーして夜中の郊外に1時間いたこと
アウトドア・タイプだなんて噂だったんだ

君にはばれるのが怖かった
だって君の理想ははっきりしてた
その理想にあてはまるまで嘘をついたのさ
偉大なるインドア系に光あれ、だ
アウトドア・タイプだなんて噂だったんだ
はくは寝袋なんか持ってたことないし
マウンテンバイクなんて問題外さ

君と一緒に週末のロクククライミングなんて無理だよ
何かしらテレビ番組があって
二度と再放送されなかつたらどうするのさ
誘われてないのと同じことだよ
なんたってほくは高所恐怖症
アウトドア・タイプだなんて噂だったんだ
いまだに泳げないし、陸行合いで無理だし
アウトドア・タイプだなんて噂だったんだ

6. ルーズィング・ユア・マインド

それを知ってほつと胸をなで下ろした
君は正気を失いかけてる
これが初めてじゃないと再確認して
来世は燃やしてしまった
君が飛び方を習って
そこには空なんかないと後から気づいた時
そこには雲がないと
そこには1本の木もないと
そして1羽の鳥もないと
燃えかすはほくの目に入らなかつた
ほくがくたびれた結び目を繕って
それを解こうとするまで
どうにも決心できない
嘘をつくべきかそれとも
真実を語ってそれを隠そうとするべきか

7. サムシングズ・ミッシング

自分自身で決断するのは別に危ないことじゃないと言うけど
それは本能がおさまった後で感じることだよ
オンポロなシャワーみたいなもんさ
熱すぎたり冷たすぎたり、そうかと思えばなまぬるい
何かか欠けてる
何かか欠けてる
何かか欠けてる
何かか欠けてる
ほくの人生には何かか欠けてる
ほくの人生には何かか欠けてる
ほくの人生には何かか欠けてる
どうしても心が決まらない時

掛けたり割ったり出来ない何か
ここには前にも来たことがある
ああ、また元通り
ここには前にも来たことがある
ああ、また元通り
何かか欠けてる
何かか欠けてる
何かか欠けてる
ほくの人生には何かか欠けてる
ほくは内面的に深くも静かでもないし
第一自分の首も持たない
ほくの人生には何かか欠けてる
心からそこに居たいと思える場所がないんだ
何もほくの苦しみを救えない
ほくの苦しみを救えるものなんかない
心からそこに居たいと思える場所がないんだ
何かか欠けてる
何かか欠けてる
何かか欠けてる

8. ノックスヴィル・ガール

ノックスヴィルである娘に会った
みんなの知っているノックスヴィルの町で
帯巻白濁の夜は彼女の家に出かけたものさ
ふたりで町から1マイルほど外れたところへ散歩に行った
オレは地面から棒を持ってその白い娘を殴り倒した
膝を折って地面に倒れた彼女は
オレの指をちぎって泣き叫んだ
ああ、響しいウィロー、今あたしを殺さないで
死ぬ心の準備ができていないわ
彼女が口をきいたのはそこまでだった
オレはいっそう彼女を殴りに殴り
回りの地面は彼女の血潮で染まっていった
オレは彼女の首の巻毛をむしつかみにして
グルン、グルンと振り回し
川の中へと投げ込んだ
ノックスヴィルの町を抜けて流れる川を
下れ、下れ、ノックスヴィル・ガール
ぐるぐる回る褐色の眼と共に
下れ、下れ、ノックスヴィル・ガール
もう決してオレの花嫁にはなれないよ
オレはノックスヴィルに引き返し
12時ごろに家に戻ると
心配していたかあさんが起きてきて仰天
おまえ、その血だらけの服はどうかのこと
オレは気をもむ母親にただの鼻血だと言った
床につくためにろうそくの火をもらい
頭痛のする頭に巻くハンカチをもらった
その夜ひと晩中寝返りを打ち続けた
厄介なことになったもんだ
地獄の炎に褥床を囲まれてるようなもんだ
目をつぶるとしよっぴかれてく自分が見えた
ノックスヴィルの牢屋にぶち込まれ
仲間みんなオレを出そうとしたけど
誰も保釈金が払えなかつた
オレはここで人生を無駄にしてるのさ
この汚ねえ古ぼけた刑務所の奥で
なぜってオレはあのノックスヴィル・ガールを殺したからさ
オレのあんなに愛したノックスヴィル・ガールをね

9. シックス

さあここに現われましたるは箱に入ったグエネス嬢の首
さあここに現われましたるは箱に入ったグエネス嬢の首
皆々さま、お演頂戴の特売だよ
さあここに現われましたるはグエネス嬢の首
スキップ、スチーブソンは死んだ
死体の肉はすべて棄つた
おまえのバリエヤを食べ終えろ

10. カモン・ダディー

ほく、スチーブンがほくのお父さんみたいな気がするんだ
どうしてかは分からないけど気がついたんだ
スチーブンの目をのぞきこんだ時
ほくのダディーみたいな気がした、ウソじゃないよ
死ぬまで抱きしめていたい

だから、ダディー、ほくの腕の中へ駆け込んでよ
ここに来て、ダディーは乗越だつて感じさせてよ
ほくの腕の中へ駆け込んでよ
死ぬまで抱きしめていたいんだ
ほくがあなたの赤ちゃんだったなんて
9歳のときまで知らなかつたよ
あなたの赤ちゃんだったってずっと知らなかつたよ
でもほくの中の何か気が付かせたんだ
ほくの中の何かあなたのほくのものを教えてくれた
だから、ダディー、ほくの腕の中へ駆け込んでよ
ここに来て、ダディーは乗越だつて感じさせてよ
ほくの腕の中へ駆け込んでよ
抱きしめていたい抱きしめていたい
死ぬまで抱きしめていたい
気がつくのが遅すぎるってことはない
ほくはたか無事ものと数にまたがって
今から始まるんだね、今から成長するんだね

11. ワン・モア・タイム

もう1回いこうよ、ベイビー
オレのこと考えてるだろ
もう1回いこうよ、ベイビー
お前はもうより上を行った
もう1回いこうよ、ベイビー
オレを愛してるって信じなさいやらないのか？
ベイビー、もう1回
ベイビー、もう1回いこうよ

12. テンダーフット

ここは俺が面目を立てる場所
これは俺が飛び降りる位置
ここは俺が巨痛に飲まれてしまうパー
もうこれ以上血も流れない
これはやつらこに達したくない
これは俺の最高の肉食王者
これは俺の悲鳴
憎めないやめさ声でしゃべらない
これが前に見えた俺の両手
関係ないよ
俺は家で、彼女はベズミ

13. セキュラー・ロッキュリッジ

(インストゥルメンタル)

14. シーガルズ・アウント・フリー

(インストゥルメンタル)

対訳：かおりアレンソン